

有効な木になろう

加藤文子

つくってみたい本がある。つくってみて、見たい本があるのだが、いまだ完成に至っていない。どこにでも持ち歩いて、ずっと持っていたいと思ってくれるようなものをつくりたくて、三十代の頃から模索しつづけている。

はじめて試作したのは一九九一年。KANADELU BONSAI——育てる上で大切な要素と題する実用編と、植物と暮らす中で浮かんだ短いことばに水彩画を添えた随想編の二部構成にしたもの。

手書きしたものをコピーしてページごとに糊づけして、表紙もつくって体裁を整えた。文庫本をひとまわり大きくしたくらいのサイズで、二冊を函はこに収めるかたちにした。

十年ののち、実用編、育てる上で大切な要素をベースに、加筆修正をしてB出版社から、『草と木の小さな鉢』が出版された。解説用に描いたラフスケッチも、イラストレーターのAさん



が自由に楽しいタッチで生かして下さった。

未発表の随想編に久々目を通してみた。ことばを辿っていると、あの頃の日々、盆栽町の生活が思い出される。

六畳と四畳半と二畳の木造の貸し家。大正十三年頃、盆栽村（当時は村と称された）開村とともに、東京から移住した大工のKさんが建てた家であるという。使い勝手はともかく、貸し家であるのにもかかわらず下駄箱やトイレの戸の建具など、なかなかの趣であった。

廊下の隅に水道管がつかないであって、そこに流し台が設置されていた。両側のわずかなスペースにガス台や小さな冷蔵庫を置いて台所にした。冷蔵庫には少量の食品しか入れられないので、必要な食材をそのつど買い足して調理をした。作り置きなど到底考えられることではなかった。

お風呂は焚き口が外にあるだけの単純なものだった。火力の調節もできず、焚きっぱなしにすると熱くなってしまうので、あんばいを計りながら入浴。なかなか忙しいのだった。

クーラーや電子レンジ、テレビやラジオを買おうとは思わず、なくても不自由を感じなかった。むしろないことが、心の空間を広くしてくれていたようにも思う。

CDの時代が変わろうとしていたが、依然とレコードを回していた。

朝の早い時間、音楽好きの友人の来訪時、夜のひと時。その時の気分で盤を選び、ターンテー

ブルに静かに置いて、針を落とす。音楽のはじまりとともに、未知の風が流れ込んでくる。何かをしながらというより、じいーつと聴いていた。

英語の辞書を片手に歌詞カードをおいながら耳を傾ける。聴いていて、song writerの心にふれたような気がした瞬間、胸が熱くなるのだった。何度もことばとメロディーを反芻して感激をふくらませた。

ひとつのことに時間をかけた日々。

随想編に書き記したことばの多くは、音楽を聴いた余韻の中で、心に残る事象と重ね合わせて浮かんできたものだ。

よく思い出す随想編のページがある。

「木になろう。役に立つ木になろう。役に立つので、皆が通ってくれる有効な木になろう。そう願って生きてみよう」

片側のページに、ようこそそのイメージで水彩で木を描いた。カーブした幹を傾けて、木の葉はハートのかたちにした。植物を幸せに育てて、キレイに育てて、たずねて来て下さる人々のことを想って書いた。

願いは今も変わっていない。ささやかな私家本を完成させることも、あきらめてはいない。



クレナイアジサイ ブーケのように咲いた

撮影：加藤文子